

福祉事業所への訪問に関する報告書

・研修テーマ

循環型経済、林福連携などの取り組みの実態調査

・訪問先

社会福祉法人長野コロニー・社会福祉法人花工房福祉会

・訪問日時

令和6年8月29～30日

・参加人数

4人

<はじめに>

長野県にある社会福祉法人長野コロニー（就労継続支援事業所）では競馬や馬術競馬において使われる馬名入りゼッケンの製造を行っている。そしてJRAファシリティーズ（JRA日本中央競馬会）と連携し、ペットボトル再生フローを導入して作られた原綿からゼッケンを製造し、資源消費の最小化、廃棄物発生を抑止など、サーキュラーエコノミーの一翼を担っている。

一方、社会福祉法人花工房では施設外就労事業、林福連携を通し“障害者とともに生き、ともに暮らす”をテーマとして様々な活動をされている。今回の研修ではこの二つの事業所を訪問し、他の就労支援事業所とはどのように異なる特徴があるのか、循環型経済の考え、林福連携を通じた取り組みが社会にどのような影響を与えているのかを調査してきた。

<成果>

社会福祉法人長野コロニーに訪問した際は、篠ノ井施設（ゼッケン工程）、若槻施設（印刷・縫製工程）を見学した。篠ノ井施設では障害のある方が一流の技術を用い、ゼッケン製造工程において活躍されている姿を目の当たりにした。就労支援事業所であっても求められる品質は高く、ミリ単位の検査をクリアしなければ不良品となる。その中でもゼッケン製作工程では9:30～16:00まで稼働し、1日300～400枚ほどのゼッケンを製造する。また、現場の様子を見ていると事業所のスタッフさんと利用者の距離が近く、とてもリラックスして仕事をされている印象を受けた。事業所の方に、利用者の方と接する際に配慮していることがあるかと質問したところ、事業所の方

は、「利用者の中でも障害の重度は異なり、その日のコンディションに応じて接すること、そして必ず共感する立場でいることを忘れないようにしている。」と話した。見学を通して気づいたように、利用者の方々が生き生きと仕事をしている背景には、事業所の方が各利用者の障害度合いや個性、その日の体調などを考慮した福祉サービス、職場環境を提供するための工夫、積み重ねられた努力によるものだと感じた。

一方、若槻施設では印刷工程、縫製工程などを行なっている長野福祉工場を中心に見学した。この施設でも工業用ミシンや高度な DTP 機能を搭載したオンデマンド印刷機などを使用し、高い基準の中で利用者が仕事をされている光景を目にした。利用者がこれだけの仕事を任されている背景には、利用者が率先して自身の自立を志し、仕事に対して真摯に向き合い、事業所の方との信頼関係を築き上げてきたものがあるからだと感じた。また、A 型の事業所を利用している方の中に、一度一般企業に就職した経験がある方がいた。その方は一般企業に就職するも、職場の中で自身だけが障害者であるという孤独感、戸惑い、不安があり、現在の就労支援事業所に戻って来られた。現在では同じ利用者の中で一般企業に就職を目指す方を支援していくことを目標とされている。また、業務とは別に、自身の好きなこととして資格を取得しようとする事務職の利用者がいた。その方は簿記一級の取得を目指し、将来は経理職に就きたいと考えているそうだ。このように、一般企業ではなくても自身の仕事に誇りを持ち、やりがいを見つけてチャレンジしている利用者も多く見受けられた。

一方、少なからず不安を抱えながら過ごしている方もいた。就労支援事業所を出て自身の望むにキャリアを歩めたとしても、新しい環境で“やりがい”を見つけられるかどうか、受け入れてくれるだろうか。こうした不安を抱きながら過ごしている方も少なくなかった。

二日目は林福連携を実施している花工房福祉会に訪問した。花工房福祉会は「障害者も地域の中で当たりまえの生活を営むことを応援し、林福連携、施設外労働の他にパンやスイーツ、醤油の製造、小物製品などの製造販売を行なっている。中でもこの事業所の特徴は、障害者が林業分野で働き、生きがいを持って社会参加する「林福連携」の取り組みで知られている。山から伐採した木材を薪ストーブ用にして販売する薪事業。竹林を整備し、残った竹を竹炭にし、キャンプ場に卸す炭事業などが挙げられる。その中でも、事業所の方は事業に対して課題と感じる点も少なくないと話した。担い手不足が深刻化し、利用者がいなければ職員が業務をこなさなければならないケースがあること、利用者から仕事よりも生活面での支援強化を求められ、経済面で利用者と施設側のギャップが生まれることもあるという。施設内の高齢化、利用者から求められる課題がある中で、工賃と仕事のバランスを保っていくことに注力されている。

<所感>

今回の研修を通し、就労支援事業所と障害を持つ方の可能性を感じた。二つの事業所の共通点として、どちらの利用者も高い技術を持って仕事をされていること、そして専門性が高い業務も任されており、職員の方と利用者の信頼関係が厚いことを実感した。また、今回の表題である、循環型経済、林福連携の取り組みに障害を持つ方が関わることによる社会への影響を強く感じた。農業・林業という多様な作業環境は、障害者が自身のペースで作業できる場所を提供し、身体的・知的障害を持つ人々も農作業の中で能力を発揮でき、社会的孤立を防ぐことができる。農福連携に障害者が参加することは、持続可能で循環型の社会を目指すためのモデルケースとなり、このような取り組みは他の産業分野にも波及し、社会全体の持続可能な発展にもつながると感じた。また、循環型経済を通した取り組み、林福連携を取り入れている事業所は“新しい価値”を創造していることも実感した。障害を持つ方が生産した農産物や製品は、地域社会や消費者にとって“社会的な価値”を持つものとして認識され、地域コミュニティ・経済に貢献することができる。さらに、障害者が積極的に農業や循環型経済に参加する姿は、地域住民や若者にとっての学びの場となり、共生社会の実現に向けた意義を高めるきっかけになると考える。

この研修を通して、循環型経済、林福連携の分野を取り入れている就労支援事業所の実態と特徴、課題について学ぶことができた。その中でも担い手不足、高齢化が今後も加速していく中で、現在の利用者に仕事としてのやりがいをもどくように見出してもらうか、障害を持つ方が社会との間に感じる壁をどのように取り除いていくかが今後も課題だと感じた。

この課題のソリューションとして、福祉に目を向ける若者が増えることが一つだと考える。“福祉”とは幸福の意味を指し、一見結びつきがないように見えるスポーツ、アート、音楽、ゲームにも関連性がある。こうしたものからアートの体験型イベント、障害者スポーツ体験会、ゲームによるリハビリ効果の促しなど、自然に福祉の関連性を示していくことができる。また、このような機会を通し、若者にとって抽象的な「福祉」という概念を、具体的な課題を可視化していくことで一人でも多く福祉に目を向けるきっかけになり、福祉の基盤をより強化していく人材が増えると私は考える。